

ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。
そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。
そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。

第19回 火の用心

秋の全国火災予防運動

11月9日～15日の7日間は、秋の全国火災予防運動の期間です。火災予防思想の普及を図り、火災の発生を予防することを目的に、全国で各種広報活動や消防訓練等が実施されます。吉富町でも期間中、防火パレードや放水訓練、夜警、各種広報活動などが実施されます(6ページ「秋の全国火災予防運動」参照)。

元々は昭和2年に起こった「北丹後地震」をきっかけに近畿地方で「防火デー」として始められた運動でしたが、全国一斉の火災予防運動としては、終戦後GHQの指導により行われたものが端緒となっています。



戦時中の防火訓練

火災との闘い

今も昔も、人々の生活は火災の危険と隣り合わせです。明治37年には、土屋壺神社付近の4軒が全焼、3軒が半焼となる火災が、その4年後には直江で38軒が焼失する近來ない規模の大火が発生しています。昭和11年には1軒から発火した炎が海からの強い北風に煽られ、一時は直江全域が危機に瀕したものの、村内また中津など周辺地区の消防組織による消火活動に助けられ、2軒が焼失したのみでこれを防ぐことができたそうです。そして昭和20年、日豊本線を通る機関車の火の粉が原因で広津の7軒が全焼しました。このときも強風であったため役場庁舎までもが類焼を危ぶまれましたが、人々の必死の消火により何とかその危機を免れたのです。

自分たちの地域を守るために

かつて中津城主の奥平侯は、毎年小祝の河原で戦技の訓練を兼ねて大規模な火災演習を行っていたそうです。その統治下で地理的にも隣接していた幸子、広津地区では、多くの人が藩に勤めていた関係上奥平侯の訓練や比較的大きな市街火災に接することが多かったため、消防の意識は自ずと高まっていたのでしょう。

明治10年頃の幸子新村区では、早くも消火用に木製の龍吐水(ポンプ)を使用しており、同じく幸子の舊村(ふるむら)区では明治34年に寄附金を募って鉄製ポンプを購入、初の私設消防組織を結成しています。組織結成は新村区や広津、和井田等にも広がりを見せ、遂に明治37年、矢頭軍司村長の努力により組員246名から成る初の公設消防組織が立ち上げられます。その後、大正7年には東吉富消防義会が結成され、戦時下の昭和14年に東吉富警防団と改称されています。そして戦後の昭和22年、新たに結成されたのが、私たちの知っている吉富町消防団です。現在、消防団は地区ごとの3分団(定員62名)から成り、火災時の消火活動はもちろん、月1回の夜警や災害時の見回り、町防災避難訓練での避難誘導、そして県消防操法大会への出場等、様々な活動を行っています。

この火災予防運動の期間は、これまでの防火活動の歴史や地元有志の方々の活動について改めて考えてみるよい機会でもあります。何より、日頃から私たち一人ひとりが小さな火の元にも注意を払い、火事の発生を未然に防ぐよう努めていかなければなりませんね。



吉富町消防団の活動風景